

28PA-am374

薬学部における低学年のためのアクティブラーニングの実践

○齋藤 博¹, 岡村 祥太¹, 千葉 輝正¹, 中村 有貴¹, 足立 哲也¹, 新井 利次¹, 小川 晴久¹, 根岸 新一¹, 山下 裕¹, 亀卦川 誠也¹, 杉田 一郎¹, 山崎 敏彦¹, 野澤 直美¹, 木村 道夫¹, 佐藤 卓美¹ (¹日本薬大)

【目的】日本薬科大学では、約10年前より低学年に対する基礎学力向上を目的とした初年次教育に力を入れています。また、近年では、入学前教育の充実化、入学後の補習講義の徹底、高等学校での教育経験者の採用など、入学生に対するリメディアル教育にも力を入れています。更に、およそ10年にわたり、教育に関するIR (Institutional Research) として入学生の入学時における学力推移ならびに前後定期試験などと入学時学力の相関などについてのデータ収集も行っています。これらのデータより、本学では低学年に対する能動的学習 (アクティブラーニング) が必要であると考え、平成29年度より、学生が専門教員に学習における疑問点を相談し、話し合いを持つことができる環境を構築・提供しています。本研究では、本学1年生に対する能動的学習の効果について報告いたします。

【方法】基礎学力定着ドリルを作成し、全1年生に配布。ドリルの内容は基礎的な薬学数学と医療に関連するキーワードについて調査する内容としました。ドリルは毎週提出ボックスに提出し、返却時は必ず専門教員から手渡しで受け取り、その際に教員とディスカッションする形式としました。

【結果・考察】全1年生 (およそ280名、留年生含む) に対して、基礎学力定着ドリルを課したところ、およそ80%程度の学生が課題を確実にこなすことができました。前期終了時にVASを用いたアンケートを実施したところ、ドリルの問題を解くことは負担ではないが、返却時に専門教員のところまで受領しに行くのが面倒であるという学生が散見されました。しかし、その一方で、専門教員と話をすることができる環境は学生の学習意欲の向上につながることも分かりました。今回は、学生アンケートの解析結果を中心に報告します。